【エッセイ部門・優秀賞】

猫が死んだ

大阪府立箕面高等学校 第２学年　生田　勇人

猫が死んだ。

その二日前には、猫は倒れた。シリンジから泥のような白い餌を与えていた。嗅げば砂糖を加えた牛乳の匂いがするが、舐めてみれば苦い泥の味がした。そうしたのも、猫の気持ちを知りたかったからだ。

シリンジで白い餌を吸い取り、猫の口を開けさせる。食欲旺盛なので、自分から口を開いてくれる。尤も、食べても吐き出してしまうことが多かった。満足に栄養を摂れず、猫は痩せていた。

右手にシリンジを掴み、押し子に親指を添える。ひと思いに押し込んでしまってはいけない。猫の口は小さく、一口はほんの少しでなければならない。目盛りが〇・一ミリリットル動く分が、猫の一口だ。だが、その猫は舌が腐っていた。舌はもはや無いと言ってもよかった。残っている分は黒ずんで、ほとんど動かなかった。だから、常にその猫は餌を飲み込むのみ難儀していた。

一気に与えてしまっても、そうしないように心掛けてもいても、猫の口から白い餌がこぼれた。与えた分の半分はこぼしてしまう。それをそのまま処分してしまうと、その猫の食べる分が減ってしまうので、唾液と混ざり口角から垂れた白い餌は右手の人差し指で拭き取る。そのときに持っていたシリンジは、横に備えている小皿に置いておく。回収した白い餌は、別の小さい碗に入れておき、あとでシリンジに入れなおして与える。

時折、猫は顔をぶるぶると振る。雨に濡れた犬が水滴を払うのと全く同じように。餌を与えているときに顔を振られると、白い餌が床に飛び散る。それを猫が踏むと、移動する度に床が汚れる。すぐに濡れた布巾で拭き取る必要がある。だから、舌打ちをしてしまうことがあった。床に落ちた分を与え直すのは、猫の身体に悪そうだから控えた。

餌を与えている最中、猫は倒れた。その場でぐるぐると回り続けたあとに直進しようとする人間のように、猫はへたりと床に倒れ込んだ。急いで病院に運んでいくと、酸欠だと診断された。餌を飲み込もうとするあまり、呼吸が優先されなかったらしい。

猫に謝った。しかし、猫に言葉は分からなかっただろう。猫はとても痩せていた。餌を満足に食べられない。足の骨は浮いていた。顔を触ると頬の骨が分かった。

今朝は、猫に餌を与える必要はなかった。猫は布団の中で痙攣していた。二日前に倒れていたのと同じ格好で倒れて、持てる力全てを振るって、四本の脚で空を掻いていた。おもちゃを追いかける様子に似ていた。それを見たのも、もう半年ほど前のことだった。

がふう、と息を吐く音が明瞭に聞こえる。気管が詰まっているのか、十秒に一度ほど息

を吐いては、またすぐに空気を吸い込んだ。

猫の瞼はほとんど落ちていた。しかし、激しい呼吸をするたびに瞼をこれでもかと言うほどにかっと開き、空を見た。私が右手を猫の頭に添えると、猫は私の方を見た。息をするのもしんどいだろうに、猫は頭を持ち上げて私を直視した。私の右手首には、猫の爪痕があった。餌をやるときに、猫は私の右腕にしがみついて離すまいとしていた。そのときについた幾本もの筋は痛々しかったが、猫には何の傷もなかった。

猫の呼吸の間隔は長くなっていった。激しく呼吸をする度に四本の脚をめちゃくちゃに振り回した。台所で餌の準備をしているときに駆けてきたのと同じ動き方だった。猫に涙を見せたくなかった。世話を母に任せ、私は自分の部屋に逃げ帰った。涙を拭いてから、平静を装ってまた猫のもとに座った。それを何度も繰り返した。その度に、猫は私を見た。首を起こして、瞼を開いて私をまっすぐに見つめた。私は目線を逸らした。

午前十時には、猫は息を引き取った。私は最後に寄り添わなかった。私は自分の部屋で涙を流していた。私の姿を必死に探しているかのように、猫の瞼はこれまでにないほどに開かれていた。懐中電灯を瞳に向けて点けても、何も動かなかった。指先で瞼を撫でて閉じさせた。毛布に包むと、猫の脚は冷え切った指先のように固まっていた。猫は本当に冷え切っていたのだ。私は泣かなかった。

半年ほど食べていなかった大好物のドライフードを猫と一緒に毛布にくるんだ。それを指先で与えようとすると、猫は私の指に噛みついた。私が反射的に手を離すと、それから猫は牙だけで餌の粒に噛みつくようになった。

最期、猫は苦しんで逝った。呼吸ができない苦しみに悶えながら、私の姿を探しながら死んだ。私は何も応えられなかった。大好物の餌の一粒を与えることさえできなかった。

食器棚の一角には、猫の餌が置いてあった。それがまだ置いてあるのかどうかは、私は分からない。

その半年後、これを書き終わって、私は猫が死んだことを漸く認めた。私は泣いた。